

# 《キリストの平和Pax Christi》非暴力の 平和メッセージ —どのように日本社会に伝えられるか?—



2024年3月14日

平和大学講座 於： 浄土宗宗務庁  
岡野 治子

## テーマの内容

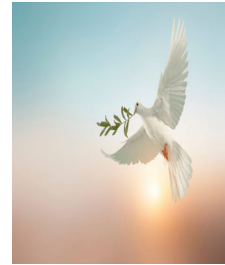


- ★ キリスト教ヒューマニティ = 「キリストの平和」
- ★ イスラエル民族の「平和観」 ⇒ 「キリストの平和」の中核
- ★ 「キリストの平和」とは? ⇒ 完全な非暴力による平和
- ★ 「ローマの平和観」受容 ⇒ 「正戦」を認めるキリスト教会に変容
- ★ 反省する現代キリスト教会の平和メッセージとそのキーワード
  - ① 過去の過ちの想起/記憶
  - ② 責任 (応答可能性/Responsibility)
  - ③ 和解
- ★ ドイツの戦後史: 「記憶・責任・未来」という「過去政策」
- ★ 「山上の説教」と「善きサマリア人」の譬えに凝縮するヒューマニティ
- ★ 「まとめに代えて」: キリスト教ヒューマニティは、どのように伝えられているか

## 現代的意味での「平和」

世界平和学会ヨハン・ガルトウングの平和定義

- ★戦争の無い状態（消極的平和）
- ★社会に構造化されている暴力の不在（積極的平和）  
 貧困、無秩序、不安、不正義、不公平、不平等、弾圧、  
 殺傷、飢餓、疾病、医療等々の不在



+

構造的弱者に向き合うポストモダンやフェミニズムの平和観

## 「イスラエルの平和」とは何か？

— 旧約聖書を手がかりに —

- ★挨拶：「シャローム！」⇒「平和」＝「あなたに敵意はない！」
- ★詩編(85:11以下)：「…**正義と平和**は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます。」
- ★選民思想の背景：「神は、**最も貧弱であったゆえに、民イスラエルを選んだ**」(申命記7:7以下)
- ★「**正義**」とは？：「善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」(イザヤ1:17)

## イスラエルの平和イメージ

### ★イザヤ書2:4

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。  
 彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。  
 国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」



### ★ゼカリア書8:12、イザヤ書11:6-9、エゼキエル書34:25

物質的、身体的幸福感に満ちた現世での平和観、人間と自然と動植物との共生・共存イメージが色彩豊かに描写されている。

## 「キリストの平和」 = 完全な非暴力 弱者のための平和

### ★神の正義と愛の対象：娼婦、寡婦、子ども、病人、取税人など

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。…天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨をふらせてくださる。」(マタイ5:44)

### ★復讐は神の手による：「…自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」(ロマ12:19)

### ★祈りにおいて神と対話をする事 = 責任 (responsus; responsibility; Verantwortung) : 神に対する応答可能性

## 「キリストの平和」の革新的本質

### ①平和は所与の状態ではない

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。

平和ではなく、剣をもたらすためにやって来たのだ。私は敵対させるために来たからである。人はその父に、娘を母に、嫁を姑に、こうして自分の家族の者が敵となる。わたしより父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくない。また自分の十字架を担ってわたしに従わないものはわたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、私のために命を失うものは、かえってそれを得るのである。」(マタ10:34-39; ルカ12:51-53)

### ②新しい共同体の創造:イエスの語る父なる神の愛と信頼で結ばれる

「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行方人たちのことである。」  
(ルカ8:21)

## パウロによって「キリストの平和」の神学化

エフェソ2:14以下

実にキリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによって私たち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。したがってあなたがたはもはや、外国人でもなく、寄留者でもなく、聖なる民に属する者。神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。

## 「ローマの平和Pax Romana」原理

- ★Pax Romana＞動詞paco＝「平定する」「支配下に置く」
- ★「ローマ法」に規定された“de bello justo”(正義の戦争):「力は力を以て撃退する」ことの正当性。
- ★軍事力に依る「ローマの平和Pax Romana」⇒ヨーロッパ言語(ロマンス語)に反映: peace, pacifism, paix, pace, paz etc.
- ★「イスラエルの平和」＝神の義により、神から与えられるもの ⇔
- ★「ローマの平和」＝強者の論理⇒敗者にとって、服従、貧困、奴隷化、権利の剥奪 ⇒「勝者が正義の定義権を有する」が伝統化。

## 「キリストの平和」の変容・変質

- ★キリスト教が公認された4世紀のローマ:教会の指導者の司教が帝国の高官を務めたこと、ローマ周辺の不安定さ。  
⇒ローマ法による「正戦」論がキリスト教会でも正当化される。
- ★アウグスティヌス(354-430):「キリスト教徒が軍隊に参加することに問題はない」「戦いは平和の回復を目的にしなければならない」⇒
- ★トマス・アキナス(1225?-1274):正戦論を継承。①君主の権威が必要 ②正当な原因が必要 ③戦争をする人たちの意図の正しさ  
(『神学大全』II-2 第40問題)
- ★教会その後:神の意思、正しい意図、同胞の解放という大義名分を掲げ、十字軍遠征等異教徒や異端に対する戦争を行い、植民地主義等の暴力性を発揮。

## 現代カトリック教会の平和メッセージ

### 第二バチカン公会議(1962-65)の画期的省察

★ 2000年教皇庁編：

#### 『記憶と和解 教会と過去の種々の過失』

(ヨハネ・パウロII世)「教会は常にその懐に罪人を抱えているために、キリストの体としての不変の聖性と浄化を不断に必要とし、休むことなく、悔い改めと刷新の努力をしなければならない。」⇒  
「赦しを請い、赦しを与え、相互理解、和解」に向けての努力。

- ① 和解への第一歩：赦し、赦されるための「心の用意」
- ② 過去の出来事への「責任」は免除されない。
- ③ 記憶の浄化：「記憶は新しい未来を開く力を持つ」

## 「記憶の浄化」・「責任」・「和解」 を目指したドイツ戦後史

- ★ニュールンベルク国際軍事裁判(1945/46)と12回の軍事裁判の体験  
・国民の不条理観「戦勝国による一方的な判断、処罰に過ぎない」お前こそ！In quoque」という敗者反論の論理が無視された。
- ★1980年代：「過去の克服」⇒ドイツの「過去政策」の施行  
「罪はナチスにあり、責任はドイツ国民に」
- ★第6代大統領 R.フォン・ヴァイツゼッカー (1984-94)：  
「いやしくもあの過去に対して目を閉ざす者は、現在に対して盲目となる。非人間的な出来事を想起しようとしなない者は、新たな感染の危機に対し抵抗力が弱くなる。」

## ドイツの（時効無しの）「過去政策」 記憶のポリティクス

- ★強制労働補償基金「記憶・責任・未来」の設立（2000年）
- ★記憶のポリティクスの実践：忘却批判「忘却は前近代的！」
  - ・記憶は単に「覚えておく」という脳の働きではない。五感を使って未来に向けて重要要素を心に刻むこと。
- ①心で考える (Re-cordare)
- ②過去の人たちを自分の仲間と思い続ける(Re-membrare)
- ③実際に触れてみる(beruehren)
- ④過去を未来のための宝物と考える(Custodire-Bewahren)

## ドイツの諸都市に見られる「記憶」の実践 「躓きの石」（ナチの犠牲者たちを記憶する）



## 和解・平和のための宗教倫理 ーヒューマニティを求めてー

- ★多くの宗教に内在する宗教倫理の再発見：  
「世界の良心」(G. メンシング)；「世界のエートス」(H. キュング)
- ★キリスト教の社会倫理：「山上の説教」(マタイ5～7章)及び  
「善きサマリア人」の譬え(ルカ10:25-37)に凝縮
- ★聖書の個々の倫理の規範は、個人倫理としては機能するが、政治・  
経済・国際間の領域では、有効ではない！？⇒ この古典的倫理批判
- ★M. ヴェーバー(『職業としての政治』)も主張するように、政治に召命され  
た人間が、「山上の説教」にある責任倫理を全体的社会性の実現に向け  
て実践するなら、国家体制も社会も成熟する。

## 「キリストの平和」という社会倫理 (1) 「山上の説教」から

- ★「心の貧しい人は幸いである」(マタイ5:3)：既成の価値基準の転換！  
社会的に疎外されたすべての弱者は、神に守られ、神に信頼を寄  
せる、へりくだった者。⇒為政者や豊かな人々への救済の要請でもある。
- ★腹を立ててはならない：「…あなたを訴える人と道を行く場合、途中で早く  
和解しなさい」(マタイ5:21-26)
- ★復讐してはならない：  
「『目には目を、歯に歯を』と命じられている、しかしわたしは言うておく。  
悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の  
頬をも向けなさい。…」(マタイ5:38-42)  
「復讐は、自分でせず、神の怒りに任せなさい」(ローマ 12-19)  
復讐の連鎖には、終わりが無い。

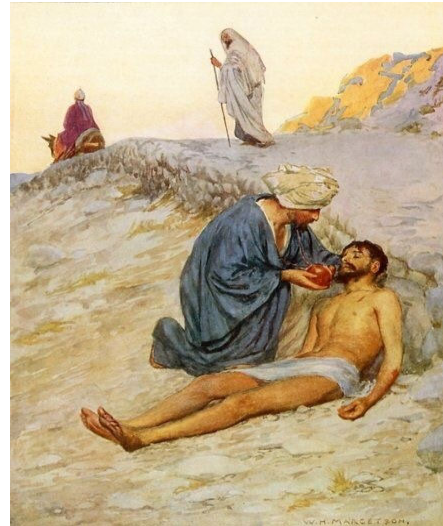


## 「キリストの平和」という社会倫理(2)

### 愛敵メッセージの意味は？

- ★「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。  
天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。」  
(マタイ5:43-48) ⇒  
憎しみに対抗する積極的姿勢の要請。

「善きサマリア人」の譬え話 ⇒



## 他者/敵に心を向ける「愛」

慈悲、思いやり、共感力、人間の尊厳を認める力

- ★「善きサマリア人」の譬え(ルカ10:25-37):
- 盗賊に襲われ、瀕死のユダヤ人を救済したのは、言い訳をしながら見捨てた同邦人ではなく、他ならぬ仇敵のサマリア人であったという譬え。
- 弱い人に寄り添い、隣人になれる徳性を持つ人々が形成する社会 = 現世での神の国建設!
- 個人の倫理的行為であっても、それは結果を見通す行為であり、トータルな社会性を目指す倫理であると同時に、成熟した人間の立ち至る処。特に政治家に求められる最も完成した倫理性である。(M. ヴェーバー)

## まとめに代えて： キリスト教ヒューマニズムを伝える

### ★多くの宗教に共通の人間理解：

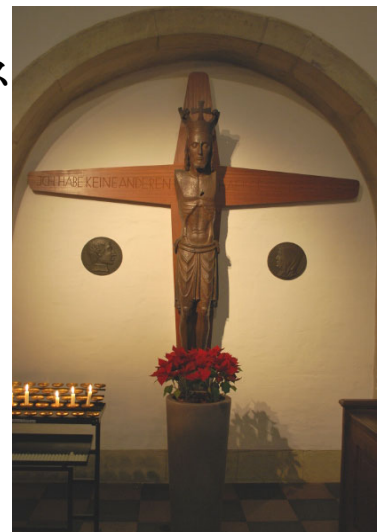
「人間は誰も、有限で、弱く、迷いやすく、内に悪の可能性を秘めている」同時に「人間には高貴な精神（神の似像性、仏性など）が宿り、自身と他者をも幸福にする可能性を秘めている。」

- 「神の似像性」：すべての人間に具わる「自由」「人権」「尊厳」
- 蘆のようにか弱い人間は、神、他の人間、自然界の動植物との関係性のなかで、「生」を全うし、文化・文明を発展させた。
- 良き関係性のための「神の義」：「貧しく弱い人間」を見捨てないこと。

## キリスト教文化圏の和解・平和の努力

### ★バチカン文書『記憶と和解』（2000年）：

- 過去の過ちの想起・記憶・告知＝記憶のポリティクス  
⇒ 責任 ⇒ 謝罪と赦し ⇒ 和解
- 「記憶は新しい未来を開く力である」 ⇒ 「躓きの石」
- 聖ルツェリ教会（ミュンスター）の戦災に遭った十字架像：  
“わたしには手がありません。あなたがわたしの  
手になってください！” ⇔
- 日本：「すべてを水に流す」文化？  
被爆・被曝による未曾有の喪失体験、過去の  
植民地主義の反省・記憶をどのように活かすか？



## 近代合理性偏重・進歩主義に警鐘！

★ミシェル・フーコー、ホルクハイマー、アドルノ（フランクフルト学派）：

秩序化、啓蒙化され、理性的とされる文明社会実現を目論む近代プロジェクトに対する批判 ⇒ 理性の主体である人間のイメージを一方向的に作り上げた。⇒

- ・ナチの犯罪は、理性偏重の結果！（同性愛、娼婦、遊牧民、精神障害者の抹殺）
- ・科学の粋を凝らした大量殺人兵器・安楽死の装備品

## 女性の視点からの「和解」メッセージ

★フェミニスト神学者ドロテー・ゼレ（1929-2003）：

- ・**記憶は神の別名**＝幼少期の、自分自身についての記憶無しには、人間は孤立する。記憶をもつことは人間の尊厳。民族の尊厳。
- ・より速く、より多く、より大ききの願望⇒「進歩主義」は、想起力を破壊。
- ・「皆が互いに犠牲者なのだから、互いに赦し合おう」＝安っぽい和解 ⇒ 具体的犠牲者の姿を見失わせる ⇔ 「一億総ざんげ」(日本)？
- ・**和解の一連の義礼**：罪の意識、心の悲しみ、口頭での告白、行為を伴った回心による償いというプロセス  
← **記憶**＝前へ押し出す神の力

## ドイツにおける「記憶・責任・和解」の教育

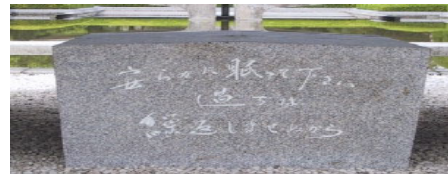
★フェミニスト神学者たちの平和理解：

「最下位の人たちが高められること」という聖書的正義を重要視。自然と共生し、共鳴し合う感性を持ち、不正義に苦しむ無辜の人々と共苦、共感し、当事者性を共有でき、人間間にある様々な差別、科学技術の進展のなかでの孤独の問題に向き合い、寄り添えるような豊かな感情移入の力と実行力を育むことが、社会教育の目的。

★こうした感性を育み、自ら考える機会：

- ①学校の宗教/倫理の時間
- ②過去の過ちを学ぶため、被害諸国と教科書を共同作成。
- ③アウシュヴィッツ強制収容所での「過去」の学び。

## 被爆・被曝国日本の課題



★苦しい過去を水に流し(?)、人類平和という普遍的メッセージ発信。

★国内外の批判・差別の想起！

★想起・記憶の力のメッセージ：栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」

〈ヒロシマ〉というとき　〈ああヒロシマ〉とやさしくこたえてくれるだろうか  
 〈ヒロシマ〉と言えば、〈パールハーバー〉　〈ヒロシマ〉と言えば〈南京虐殺〉・・・  
 〈ヒロシマ〉といえば　〈ああヒロシマ〉とやさしく返ってくるためには  
 捨てた筈の武器を　ほんとうに捨てねばならない・・・その日まで　残酷と不信の苦い都市だ  
 私たちは潜在する放射能に　灼かれるパリアだ・・・  
 〈ヒロシマ〉といえば　〈ああヒロシマ〉とやさしいこたえが返ってくるためには  
 わたしたちは　わたしたちの汚れた手をきよめねばならない（1976年）